

# 現代メディア社会における知覚様式の変容について

著者	岩本 一善
雑誌名	神戸山手短期大学紀要
号	47
ページ	111-122
発行年	2004-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000878/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000878/</a>

# 現代メディア社会における知覚様式の変容について

岩 本 一 善

キー・ワード：擬似環境・メディア社会・ヴィリリオ、P.

「ヘッ!! それじゃあ聞くがよ……何が本当で何が嘘だってどうしてわかるんだよ? まわりを見てみろッ!! こんな闇の中にいてどうやったらわかるんだ!? テレビも新聞も何もねえんだぜッ!! 人間なんてのは自分の目以外に頼るもんがなかったら、隣の家や部屋で何が起きたかって程度のことさえわからねえような存在なんだぜッ。本来、俺たちにゃテレビとかに頼らずに数万キロも離れた先での出来事を知るなんてこたあ不可能なんだッ。テレビとか新聞やパソコンなんかが発達した情報化社会ってヤツじゃあそんなことは忘れちゃうがよッ。しかもその情報ってヤツはイチイチ疑ってたらキリがねえから……真実かどうかなんて関係なく鵜呑みにする以外ねえんだ。俺たちちものごとを本当に判断するにはあまりにも小せえ存在なんだよッ。無力なんだよ」<sup>(\*)</sup>

## 0. はじめに

もうすでに何度引用してきたのか、あるいはされてきたのか。いい加減食傷気味ではあるのだが、それでもなお以下のフレーズの告げる意味内容は、いまだにその同時代的なイムパクト、またその重要性を些かも失うことはない。だから私はここで性懲りもなく、W・ベンヤミン (Benjamin, W.) が、P・ヴァレリー (Varely, P.) の『芸術論集』におさめられた「現在性の獲得」という文章の一説を引用しつつ述べていることを再び記しておくことにする。

「芸術の基礎づけがおこなわれ、そのさまざまな類型が確立したのは、現代と画然と区別される時代、事物や環境を支配する人間の力が現代にくらべきわめて微弱だった時代にまでさかのぼる。現代の芸術手段は、その適応能力と精緻さという点で、おどろくべき生長をなしとげたが、このことは近い将来、古典的な美の工業生産がきわめて激しい変化をとげること、を、われわれに約束している。すべての芸術には物質的な部分がある。それは、もはや以前のような芸術観や芸術作品の取り扱いかたを不可能にし、近代科学や現代的実践の影響からのがれることを許さない。素材も空間も、すべてはここ二十年来、むかし存在していたものとはすっかり異なっている。われわれはこのような大きな変革が芸術の技術全体を変化

させ、それによって手法そのものにも影響を与えて、ついにはおそらく芸術という概念そのものをも、きわめて魔法的な方法で変えてしまうにいたるであろうことを、覚悟していなければなるまい」(\*2)

「広大な歴史的時間のなかでは人間の集合体のありかたが変化するにつれて、その知覚様式も変わる。人間の知覚が形成される方式(知覚のメディア)は単に自然の制約だけでなく、歴史の制約も受ける」(\*3)

さて、ぬけぬけと書き写した後で、私は今この文章を執筆している職場の部屋からふと窓の外に目をやる。そして私の眼下に広がる神戸元町の光景の中から、手つかずで生のままの自然、人為的な手の及んでいない自然と呼べるものを探してみる。だがそんな思いつきが頭をよぎった直後にもうすでに自分でもわかっていたように、そんなものはここではもはや頭上に広がる空ぐらいしか残されていない。

しかし、そんなことは今さら驚くべきことでも、ことさらに嘆いてみせるべきことでもない。あらためて思い起こしてみれば、現代の私たちの生活において、およそ人工物の、それもなんらかのテクノロジーによって産み出された人工物の恩恵に浴さないですませられる部分など、ほとんど見当たらないのだから。現代社会においては、衣食住のみならず、すべての生活の局面に渡って、否応もなくテクノロジーの所産とかかわりにならざるを得ないのだ。哲学者である今道友信によれば、かつてはいわゆる「自然」だけが人間にとっての環境であったが、機械の登場以来、今や「技術連関」(conjunction technologique)という、自然環境とは別のもう一つの技術的な環境があるのだという。そしてそれは、「それによって人間が生活を便利にすることのできる、一つの体系」、「機械が連絡しあった世界」であり、「自然と並んでわれわれの日常生活の環境」になっているのだという(\*4)。

現代社会において、私たちの生活に現に圧倒的な影響力を行使しているであろう「歴史の制約」、それがこの「技術連関」という社会システムにこそほかならない。そしてこのとき、「人間の知覚が形成される方式(知覚のメディア)」に最もダイレクトな影響を及ぼしているのが、AV (audiovisual) ミディアを中心とした現代のコミュニケーション・ミディアであろう。本稿においては、現代メディア社会における、そのような私たちの「知覚様式」の変化について粗描していくことにする。

## 1. 「擬似環境」という第二の自然

私たちの感受性、その「知覚様式」のうちに醸成されるであろう変化、それらに最も強い影響力を及ぼしているのが、現代のコミュニケーション・ミディア、それもテレビジョン(以下、

TVと表記)をはじめとするAVメディアを日常的に享受するという「経験」であろう。それは、私たちが外部の環境から得られる情報を知覚する様式、自分の周囲の世界について知るためのモードを変化させた。

周知のように、社会の近代化にともない、社会分化が増大し、社会構造が複雑化した。「人は誰も独りでは生きてはいけない」などという洒落臭いセリフは、かつての伝統的な共同体システム内で、自分の生活を成り立たせているモノやサービス、そしてその生産にかかわりのある人びとと、その気になれば「直接」触れ合うことのできた時代には、世俗的な処世術や道徳的規律として、それなりに意味もあったことだろう。しかし「技術連関」下にある現代社会においては、わざわざそんなセリフを口に出すまでもなく、文字通り人は独りでは生きていくことなどできないのだ。しかも、その生活を支えているはずの「他者」と、対面的な状況でじかに接する機会は限りなくゼロに近づき、モノやサービスを通じて間接的にのみ接することがほとんどとなった。人びとは、伝統的な共同体システムで生活していた時代とは異なり、自分とかかわりのある社会のシステム全体との直接的な触れ合いをもつことができなくなったということだ。それほど「技術連関」の環境下においては、一人の人間が生活するうえでかわりをもたざるを得ない社会が拡張すると同時に、複雑に細分化しているのである。それはもう、一個人が自分の能力で把握できる域をはるかに越えてしまっている。

そしてそれは、私たちが外部の世界をどのようなものとして、またどのように「経験」するのかという点についても同様となる。私たちはかつて、「直接的接触の世界」<sup>(\*)5)</sup>あるいは「現実環境 (real environment)」<sup>(\*)6)</sup>を主たる生活の場として暮らしてきた。それは、対面的直接コミュニケーションを基盤とした一次の世界であり、また自らが外部環境の情報を直接的に経験することが可能な世界でもある。そこで経験されることは、すべて自身によって見聞きし、触れ、味わい嗅ぐことによって得られたものであり、仮にそのようにして得られた経験をもとにこの世界に働きかけた行為の結果に不具合が生じたとしても、私たちには自身の能力と判断でその調整を試みる余地が残されていた。しかし前述のとおり、現代社会は莫大で複雑に入り組み、もはや一個人の認識能力では処理しきれないような世界となってしまっている。しかも私たちはそのような世界と否応なく関与して生活していかざるを得ない。こうして、それとかかわらざるを得ないのに、それ自体としては把握不可能なほど膨れ上がり、かつまた複雑化した「現実環境」に代わるものとして、私たちは自らの世界をイメージとしてとして頭の中に描く。そして、それを自己の環境と想定し、そのイメージに対して実際の行為を働きかけることになる。

W・リップマン (Lippmann, W.) は、このように頭の中で構成されたイメージを「擬似環境 (pseudo-environment)」と名付けた。移動、伝達といったコミュニケーション・メディアが高度に発達した現代社会においては、この「擬似環境」の肥大化がますます加速している。このとき、私たちに代わって事実を「経験」し、それをこの「擬似環境」というイメージに処理し

て私たちに伝えるうでで大きな役割を果たしているのがマス・コミュニケーションのメディアである。リップマンが指摘したのもこの点だ。いうまでもないことだろうが、マス・メディアによって代理的に経験される「事実」が私たちに伝えられるのは、そのような「事実」に任意にニュース・ヴァリューを見出し、それを言葉なり映像なりの形で記述し加工する、多数の専門家の手による処理を経た後となる。とすれば、手つかずの事実が「事実」として私たちに伝えられる間には、それが意図的なものであるか否かは措くとしても、何らかの変形が加えられるであろう潜在的な可能性が極めて高いということになる。また「擬似環境」のイメージは、マス・メディアにより提示された情報を主たる要因として形成されるのだが、そのような情報は「ステレオタイプ (stereotype)」、つまり画一的な既成イメージや先入観、偏見といった、単純化された紋切り型にはめ込まれて送り込まれることが多い。マス・メディアによって伝達される「事実」を「現実環境」と照合し検証する能力も余裕もない私たちは、これによってますます「現実環境」と「擬似環境」とのギャップを大きなものにしていくだろう、というのがリップマンの憂慮であった<sup>(\*)</sup>。

高度情報社会などと称されるようになってすでに久しい現代社会に生活する私たちにとって、リップマンのこの憂慮はますます切実なものになってきているだろう。たとえば藤竹暁は、すでに1968年の段階で、事態は「擬似環境の自己展開 (= 擬似環境の環境化)」という段階を来しているとした。それによれば、ジャーナリズム活動が専門的職業による周期性をもった活動となり、さらにそれが資本主義社会における利潤を生む活動としてなされ、私たち受け手にとっての「環境」を意味付ける行為、サービスが商品として成立するようになると、「擬似環境」が「現実環境」に取って代わって、実質上私たちを取り巻く日常的世界となるのだという。確かに、今やメディアによって媒介されるイメージ群ばかりでなく、その他の人工物から構成される世界は、私たちにとってもはや第二の自然ともいってよいほどに遍在している。しかしここでさらに重要な指摘は、「擬似環境」においては、「現実環境」のように、自身が直接経験し行動した結果にもとづき、当事者による主体的な意味付けがなされるのではなく、私たち受け手に提示された時点ですでに、それが意図的な関与によるものなのか否かを問わず、何らかの意味を担わされてしまっているという点である。つまり私たちは、「擬似環境の環境化」という事態においては、自身による主体的な判断によって私たちを取り巻く外的諸条件にかんする意味付けを行なうというのではなく、すでに何者かにより与えられた意味をそのまま受容するということになるのだ。それによって私たちは、社会の他のメンバーとの間に、擬似的なものとはいえ、互いに共有される世界を構築することになるのだという<sup>(\*)</sup>。

ひとまずここでポイントを整理しておく。私たちはもはや自らの直接的な経験からフィードバックされる知識や情報によって構成される「現実環境」には暮らしていないこと (少なくとも「現実環境」を主たる生活世界の場にはしていないこと)、現代メディア社会においてそれに取って代わったのが、多くの場合マス・コミュニケーションのメディアによる代理的な経験

を間接的に受容することによって構成されたイメージの世界、すなわち「擬似環境」であること、そしてそのような「他者」の代理的な経験によって構成された「擬似環境」は、私たちがそれを自分自身で直接オリジナルの「事実」と照合し検討することが可能であるような域を超越して拡大し、かつ細分化してしまっていること、以上となる。

## 2. <見る> ことの変容

そのような環境下にあって、私たちの「知覚様式」はどのように変化したのか。ひとつあげるとすれば、私たちが「現実」を知覚するときに適用する「構え (set)」が変わったといえるのではないか。一般に私たちは、依然としてなお、実際に自らが見聞きし、触れ、味わい、嗅ぐといった直接的に経験することができる世界の中で、顔と顔とを直接向かいあわせて取り交わされる、直接的対面的 (face-to-face) コミュニケーションを基盤にして生活していると錯覚している。しかし現に、私たちが「知って」いると思っている知識や情報を物理的な量に換算してみれば、おそらくその総量の大半が、実際にはTVをはじめとしたマス・コミュニケーションのメディアから得られた、換言すれば自分自身で直接体験したものではない、生身の知覚の及ばないような広範囲にわたる知識や情報なのではないだろうか<sup>(9)</sup>。そうすると私たちは、すでに常態化してしまったイメージの世界をもとに「現実」を知覚するようになる。その結果もたらされるのは、イメージの世界が現実の世界を凌駕するという事態である。従来は、まず現実の世界がしっかりと存在したうえで初めて、その副次的な世界としてイメージの世界、「擬似環境」が存在可能であったはずなのに、今や現実の方が「擬似環境」の二次的な世界になるのである。もはや、ある出来事、ある空間がそれ自体として捉えられることはなくなる。それらは、それらについてのイメージ、情報、地図に取って代わる。「出来事の情報」「出来事のイメージ」「場所の地図」から、「情報、イメージとしての出来事」「地図の空間」へのシフトである。そしてこのとき、イメージと現実との間に齟齬が見出されたとしたならば、非難されるのはイメージではなく現実の方となるのだ。

この間の事情は別の機会<sup>(10)</sup>で触れたので詳細は省略するが、おおよそこのような事態は一般的に憂えるべき倒錯的な事態として記述されてきた。たとえば清水幾多郎は、マス・コミュニケーションの高度の技術化、機構化がそのまま進歩として解されるためには、マス・コミュニケーションによる事実の「コピー」が「オリジナル」を忠実に写し取ったものであるという条件が満たされていなければならないのに、実際には両者の間にはギャップが存在しているだけでなく、「コピーの支配」という事態が生じている、と指摘した。そしてその結果、私たち受け手は、「人間能力のペシミズム観」を呼び起こされるのだ、とする。

「テレビの映像は巨大な機構があるオリジナル (原物) をコピーしたものであるが、受け手にとってはつねにコピーしか手中にできない。このコピーがはたしてオリジナルと正確に照

合しているかどうかを検証することはできない。テレビの出現による『活字の時代から映像の時代への変化は、われわれが証拠を握る時代から証拠を奪われる時代への変化である』<sup>(\*)11)</sup>

実際は、メディアが活字であっても、私たち一般の受け手が必ずしも常に「オリジナル」にアクセス可能であるとは限らないことには変わりがないから、より正確には、「活字の時代から映像の時代への変化」というよりは、TVというAVメディアの普及による、「私たちの日常的な世界の『現実環境』から『擬似環境』へのシフト」ということになるだろう。いずれにせよ、「擬似環境の自己展開」にしても「コピーの支配」にしても、そのような問題提起の前提にあるのは、まず「現実環境」や「オリジナル」な世界がプライマルなものとして存在していなければならないという確信と、現代メディア社会においては「擬似環境」や「コピー」がそれらに取って代わってしまっているということへの憂慮である。あるいはまた、私たちが世界を認識する手段、その手がかりとして、メディアから提供されるイメージにほぼ全面的に依拠しているという事態がもはや後戻りできないものならば、そのようなイメージの世界の妥当性を糾していこうという視座である。だが果たしてそれは憂えるべき事態であり、またメディアによって伝えられるイメージとは、何らかの修正が加えなければならないような欠陥を包含したものなのだろうか。さらにいえば、そうした欠陥——要するにそれは、イメージには「現実」が正確には反映されないということなのだろうが——が存在するとして、ではそのようなイメージの方にこそ私たちがリアリティを感じているのだとしたらどうなのだろうか。

確かに、石田佐恵子により指摘されているとおり、私たちの実質的な日常生活の場面がメディアにより伝えられる情報をもとに構成されるイメージの世界にその重心を移してしまったということと、では私たちがそのような世界にリアリティを感じているかどうかということとは、別の次元に属する問題である。そのうえで石田は、「今のところ、メディアによって構成される〈現実〉をそもそもそれと意識するかどうか、そしてそれにリアリティを感じるかどうかという点では、世代間や地域間、個人間でギャップがあるようだ。(中略) ある人がある環境にリアリティを感じるのは、ある一定期間その環境に慣れ親しんだことの結果にすぎない」<sup>(\*)12)</sup>としている。逆にいえばそれは、「ある一定期間その環境に慣れ親し」みさえすれば、「現実」のどのようなヴァリエーション、ミディエイトされたイメージであっても、それなりのリアリティを獲得できるのだということになる。その点からすれば、私たちはもうすっかりメディアによって媒介されるイメージ、そしてそれをもとに構成される「擬似環境」の世界にすっかり慣れ親しんでしまっているのではないだろうか。では、直接的に経験される「現実」ではなく、イメージの方によりリアリティを見出してしまうという事態の倒錯性についてはどうだろうか。再び石田から引用すると、

「ある種の青年たちの特質を説明するのに、メディアによって構成される世界にのみ没入し

『現実の』人びとのかかわりがうまくできない、という議論がある。このような議論は、『現実とメディアによって構成される世界とは違うものだ』という前提から出発している。こうした前提からすると、メディアによって構成される『つくりものの現実』にリアリティを感じる青年たちは、本来の感覚からすると倒錯しており、リアリティ感覚のバランスを欠いていることになる」(\*13)

これは、明示的にであれ暗示的にであれ、フィクション(=虚構)であること、エンタテインメント(=娯楽)であることがそのメッセージの意図として読み取れるイメージについてであれば、間違いなくあてはまることだ。自分の周囲を取り巻く環境について、そのようなフィクションやエンタテインメントとしてのイメージによりリアリティを感じているのだとしたら、それはまさに倒錯にこそほかならない。しかしここで問題にしているのは、曲がりなりにもジャーナリストまたはジャーナリズム組織という専門家の職能としての日々の記録、元を糺せば「事実」をもとに構成されているはずの、私たちの外部を取り囲む世界の記録としての「擬似環境」なのである。「擬似環境」それ自体は、本来は二次的な世界であったものとしても、少なくともことばの表面上の意味ではフィクションなどではない。それが、ある程度は世界を認識する手段や手がかりとして有効であり、また信頼に足るものと判断されるからこそ、繰り返し喧伝されるマス・メディア批判、あるいはまた「現代の若年層には『メディアの世界』と『現実の世界』とを混同する傾向が見られる」などという世俗的な批判をまえに、それでもなお私たちは現にこうして、「現実環境」よりも「擬似環境」に重心を置きつつ日常生活を送るという「倒錯」を、ほぼ支障なく罷り通すことができているのだ。だから実際には、現代社会に生活する私たちの大部分は、実は「現実環境」よりも「メディア環境」の方によりリアリティを感じていながら、自身ではそのことを意識していない、あるいはあえて意識しようとはしていないのだといった方が正確なのではないだろうか。

こうして私たちは、「みる人ではなく再見する人」でしかなくなる。

「いまのわれわれはみる人ではなく再見する人でしかない。われわれの生産様式(大量生産)において同一なるものの同語反復的くりかえしがおこなわれているが、それとおなじようなメカニズムがわれわれの知覚の様態においても機能している。われわれはすでにみたものをふたたびみることに時間と生命をついやしている」(\*14)

政治的なセレモニーが、スポーツやライブ演奏が、出来事が、場所が、人間が、あらかじめミディエイトされることが前提となっている「事実」として事前にプログラムされる。現場にいて、自身による直接的な経験として現前の「事実」を認識する人も、「擬似環境」と接触することで得られた情報がその認識の枠組みを構成するソースとなる。このとき、ラング夫妻



(Lang & Lang) の古典的なマス・コミュニケーション研究の知見からもすでに明らかになっていたように<sup>(\*)15)</sup>、TVというメディアがカメラの前にある「事実」をそのまま忠実に反映することなどあり得ないのだということは、もはや今さら取り立てて指摘するまでもないことだろう。問題は、現代メディア社会を日常的な生活の場として生きている私たちが、そういった事態をおそらく自覚のないまま承知したうえで、それでもあえて「ミディエイトされた事実」、「擬似環境」の方を自らにとって馴れ親しんだ「事実」として選択し、受け入れているということにあるのだ。

### 3. 「人工性」と「快適性」に対する傾向

マクルーハン (McLuhan, M.) は、「いかなる発明あるいは技術も、われわれの身体を拡張ないし自己切断したもの」であるから、それを常用することによって、感覚の「新しい比率ないし新しい均衡」がもたらされることは不可避であるとした<sup>(\*)16)</sup>。とすれば、ヒトが道具を使うようになって以来、いやなにもそこまで大仰に構えなくても、近代以降のテクノロジーの爆発的な発展を迎えて以来、私たちの感覚比率、「知覚様式」も相応の変化をしてきたのだということになる。それは、生身の直接性よりもミディエイトされた間接性、「人工性」に対する傾向であり、そのような傾向性は、メディアを介してある地点とある地点とをリアル・タイムに結びつけることによって時間＝距離を無化してしまうというヴェクトルに沿って、たとえば電信、電話、TVをはじめとしたテレ・コミュニケーション・テクノロジーなどを産み出してきた。それはまた、「快適性」に対する傾向であり、そのような傾向性は、人や物の物理的な移動速度を高めることによって距離＝時間を克服し、人と人との関係をより簡便に接近させようというヴェクトルに沿って、たとえば船舶、汽車、自動車、航空機などのテクノロジーを産み出してきた。

AVメディアを中心とした現代のコミュニケーション・メディアは、別種のものでありながら、もともとコインの表裏のように一体をなしていたこの二つの傾向を一気に結びつける。そのようなメディアは、およそTVにおいて集約された技術がリファインされ、さらに高忠実度を指向して開発されてきたものといってよいだろう。この「高忠実度化 (high fidelity)」ということ自体が、その根本に「人工性」の香をおびている。メディアによって媒介される「事実」を、いかに「生身」で直接的に経験される無媒介の「事実」と近似的なイメージや状態として再現 (represent) するのかということ、このことがすでに逆説的に「生身」の否定に結びついているからだ。「生身」のコミュニケーションに可能な限り近似なものとなる状態をいかに再現するかという方向性自体が、私たちに本性としてそなわっている「人工性」に対する傾向から推進されたものなのである。実際、高品位TV (HDTV) のようなメディアは、すでに実像をも超越してしまったイメージやサウンド、ハイパーリアル (hyper real) を再現している (作りだしている?) とさえ指摘されることがある。このような「人工性」に対する傾向というこ

とからすれば、「高忠実度化」を指向するメディアに対する傾向性とはまったく対蹠的であるはずの、直接的なコミュニケーションが可能な状況において、電話や電子メールなどといった、あえてそれよりも情報量が制限されてしまうようなメディアを介したコミュニケーション手段を選択するという心性も、その根底に流れているものは変わらない。過剰であるのか、逆に制限されているのかという違いはあっても、それらはともに生身の直接性を迂回しようとしているのだから。ではなぜそのように、生身の直接性が避けられ、「人工性」に対する傾向が生まれるのだろうか。

それはおそらく、「生身の事実」よりも情報を限定されたメディアを介して伝えられる「世界」に、ある種の快適さが存在するからなのではないか。その「高忠実度化」をハイパーリアル域にまで高めているAVメディアを中心とした現代のコミュニケーション・メディアではあるが、当然のことながら文字通りその情報のチャネルは、音声 (audio) と映像 (visual) との情報に限定される。そこには嗅覚や、味覚も含めた触覚により得られる、匂いや香り、肌で感じる空気にかんする情報が脱落している。視覚、聴覚といった遠感覚から得られる情報が、私たちが自分の内外の環境について知るための情報の中で大きな配分を占めていることは確かだろう。だからこそ現代のコミュニケーション・メディアは、私たちの視聴覚器官を拡張し、それ以外の感覚器官を切断する方向に沿って発展してきたのだろう。そしてそれにともない、近代以降、私たちは遠感覚への依存度をますます強化してきたといえる。一方、そこから抜け落ちた、嗅覚、味覚、触覚といった、近傍感覚や遠感覚から得られる情報が伝えるのが、まさに「今、ここ」でこの世界の中に現に存在していることという、生々しい直接性なのではないだろうか。現代のコミュニケーション・メディアの、いわば脱臭 (deodorize) された情報は、そのような現実の生々しさを欠いているぶん、そうした情報から世界を知る私たちは、良くも悪くも世界に対してある種の距離をとること (detached) ができるようになり、そしてまた、そのようなものとして世界に接することが常態となる。デオドライズされた情報、それは心地よい。しかも、日々のニュースを通じて、実際にその現場に立ち会って直接経験していたとしたらとても直視できなかつたり、やり切れなかつたりするであろうタフな情報が間断なく伝えられてくる私たちの社会においては、逆にニュースはデオドライズされたものである必要がある。そしてデオドライズされた情報であればこそ、またそのようにして伝達されたものに対して心理的な距離をおくことができるからこそ、それは想像力を欠いた感受性にとっても容易に受け入れることが可能なものとなる。「擬似環境」が「現実環境」を凌駕し、私たちにとっての「リアリティ」が、AVの情報に限定された「擬似環境」によるイメージの世界になったのも、そのような「快適性」からではないのか。

こうして私たちは、ミディエイトされたイメージの世界を自分たちの日常的な世界とすることで「人工性」と「快適性」を増加させ、現実の世界との直接的な接触を徐々に失うことになる。そしてその結果、現実の空間を物理的に移動することによって実際に自らが経験してきた

もの、「リアル・スペース (real space)」「リアル・プレイス (real place)」の情報に代わって、メディアにより瞬時に伝達されるイメージ、「リアル・タイム (real time)」の情報が優位に立つことになる。そしてそれは、「突然、日常活動の時空を一瞬にして乗り越える『速度空間』の『瞬時性 (ライブ)』」を出現させ、全ての場所をテレトポロジー的に相互浸透させ、相互交換する」(\*17) のである。P・ヴィリリオ (Virilio, P.) によればそれは、水や大気の汚染といったものと並んでわれわれの環境を「破壊」している、「速度圏 (dromosphere)」の汚染であるという(\*18)。だが私たちは、どうやら私たちに本性あるいは習性としてそなわっている「人工性」と「快適性」に対する傾向を動因として、自然環境を作り変えてきた (あるいはそうやってよければ、汚染してきた) ばかりではなく、コミュニケーション・メディアから間接的に伝えられるイメージから構成される「疑似環境」を、「現実環境」に代わる自らの第二の自然として選択してしまったのである。私たちがこれまでコトバという人工物を使って世界を記述してきたように、これからは現代のコミュニケーション・メディアによって伝達されるイメージが私たちの世界の新しい記述となるだろう。またそれによって私たちの活動領域は、空間や時間といった物理的諸条件によって限定されることはなくなるだろう。私たちの知覚が及ぶ範囲を限定する条件は、専らコミュニケーション・メディアに適用されるテクノロジーと、それを使用する私たち自身の感受性にそれが受け入れられるか否かという問題に絞られることになる。それこそが現代メディア社会における、私たちの「知覚様式」の変化なのである。だがもしそうならば、とヴィリリオは指摘する。「世界における人間の存在、現実での人間の存在は、どこに位置するのだろうか？ 遠隔存在 (テレプレザンス) は確かに認められるとしても、それはどこに位置づけられるのだろうか？ どの場所から、どの位置から？ 同時に存在する『生きている現在』。そう、私が至る所にいるとすれば、いったい私はどこにいるのだろうか？」(\*19) と。

#### 4. おわりに

ヴィリリオの指摘は至当なものだが、それでもなお、私たちが「今、ここ」にこうして生きているということの確かさが存在する。「私」は生身の身体を持った人間として生きている、その物理的制約の中に生きているのだという、拭い去り難い感覚が確かに存在している。存在してはいるが、一方でそれは、あらためてそのようなことを再認してみなければならないほど、私たちがもはや抜き差しならないまでに「疑似環境」という環境に取り囲まれて生活しているということの証左でもある。「私たちが今ここで生きている世界は果たして本当に現実の世界なのだろうか？」というオブセッションをモチーフにしたフィクションが繰り返し製作され、その度にそれらがある程度の反響を呼び起こしているのも同じ理由からであろう。確かに、今私たちがここに生きているという、この確かな感覚が失われてしまうほどに、私たちの環境が徹底的にミディエイトされ擬制されたものになるなどという事態が到来するとは思えない。しかしだからといって、よほどの災禍、事故に遭遇でもない限り、私たちが、現代のコミュニ

ケーション・メディアの恩恵に浴しているこのような生活を抛擲しなければならないような事態もまた想像することができないのである。だとすれば私たちの取るべき態度は、もはや取り戻すことなどできなくなってしまった生身の直接性という経験に必要以上に懐旧の念を抱くことなどではないはずだ。私たちが今や、「ミディエイトされたイメージとしての事実」、「擬似環境」の方を自らにとって馴れ親しんだ「事実」として選択し、受け入れていることを自覚したうえで、この現代メディア社会におけるエコロジーを打ち立てること、それこそが当面の課題ではないのだろうか。

「……なんだか兄貴、判んなくなっちゃたな、俺ア。……抱かれてンのは確かに俺なんだが……抱いてる俺は一体……何処の誰だろう？」<sup>(\*)20)</sup>

#### 註

(\*)1) 望月峯太郎『ドラゴンヘッド』第7巻、講談社ヤンマガKC、1998。なお、句読点は引用者により補足。

(\*)2) P・ヴァレリー『芸術論集』、Benjamin, W. *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit; drei Studient zur Kunstsoziologie*. Suhrkamm. 1936, 1973. (高木久雄・高原宏平訳「複製技術の時代における芸術作品」、佐々木基一編集解説『複製技術時代の芸術——ヴァルター・ベンヤミン著作集2』所収、晶文社、1970)

(\*)3) Benjamin, *ibid.*

(\*)4) 今道友信『エコエティカ』講談社学術文庫、1990。

(\*)5) 清水幾太郎『政治とは何か』みすず書房、1950。

(\*)6) Lippman, W. *Public Opinion*. 1922. (掛川トミ子訳『世論』(上)(下)、岩波書店、1987)

(\*)7) Lippman, *ibid.*

(\*)8) 藤竹晁『現代マス・コミュニケーションの理論』日本放送出版協会、1968。

(\*)9) もちろん、一人の人間が持っている知識や情報を量に換算してしまうという試みにはある種のトリックがあることは承知している。人間の記憶という心的情報は、物理的な情報とは異なり、個人がそれに対してどのような意味付けをしているのかという、質的な側面が大きいからだ。しかしここではそのような議論には立ち入らないでおく。この点については、[岩本一善「人間コミュニケーション・プロセスに関する一考察——物理的情報と心的情報との間にある断層について——」『マス・コミュニケーション研究』43号、1993]において詳しく述べた。

(\*)10) 岩本一善『「擬似環境論」再考』『神戸山手女子短期大学 環境文化研究所紀要』第3号、1999。

(\*)11) 清水幾太郎「テレビジョン時代」『現代思想入門』岩波書店、1959。

(\*)12) 石田佐恵子『有名性という文化装置』勁草書房、1998。

(\*)13) 石田、同上書。

(\*)14) Virilio, P. *L'Horizon Négatif*. 1984.(丸岡高弘訳『ネガティブ・ホライズン 速度と知覚の変容』産業図書、2003)

(\*)15) Lang, K and G. E. Lang, *The Unique Perspective of Television and its Effect*, *American Sociological Review*, 18 (1) (1953): 103-112. (K・ラング、G・E・ラング「テレビ独自の現実再現とその効果・

予備的研究」、W・シュラム編『新版マス・コミュニケーション』学習院大学社会学研究室訳、東京創元社、1968、所収)

(\*16) McLuhan, M. *Understanding Media: The Extensions of Man.* 1964. (栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房、1987)

(\*17) Virilio, P. *L'Inertie Polaire.* 1990. (土屋進訳『瞬間の君臨 リアルタイム世界の構造と人間社会の行方』新評論、2003)

(\*18) Virilio, P. *Open Sky.* 1997. Trans. Julie Rose. Trans. of *La Vitesse de Libération.* 1995.

(\*19) Virilio, *op. cit.*

(\*20) 「粗忽長屋」『古典落語 小さん集』ちくま文庫、1990。